

文学作品の誤った読み取りに及ぼす共感性と信念の影響

立木 徹*・伏見 陽児**・麻柄 啓一***

問題と目的

文学作品を読んで主人公の行動に一喜一憂し、主人公と同じように喜び悲しむ子どもの姿を想像するのは難しくない。子どもと登場人物の心情の関わりについて、須田 (1991 a) は「文学教材が子どもたちに好まれるのは、文学教材を読んで共感なり、身につまされることがあるからである」と述べている。小学校では、漢字や言葉遣いの指導だけでなくさまざまな文学作品を教材とした読みの指導が行われている。そこでは、登場人物の自然や人に対する心情を理解することや (須田 1991 b)、登場人物の心情や場面についての描写など、優れた叙述を味わいながら読むこと (小学校学習指導要領国語の5年および6年の内容) が重要であると指摘されている。また、人の気持を想像し、場面の状景を想像しながら読むようにするには、人物になりきって読むことが大切であり (石田 1980)、読み手が作品をとおして人物とともに行為し、共に考え、共に感じ、共に喜び悲しむことができるように指導することが必要であるとも言われている (石田 1980)。このように文学作品の読みにおける心情理解、とくに登場人物に対する共感、文学作品について指導する上で考慮しなくてはならない一つの要素であると言える。

しかしながら登場人物に対する共感と読みがどのように関わっているかを検討した教育心理学的研究は見あたらない。本研究では、登場人物に対する共感と読みの問題について、文学作品『ごんぎつね』 (新美南吉作) を例にして検討してみたい。

文学作品『ごんぎつね』における誤った読み取りとその修正の困難さについてはすでに次のような報告がされている (立木・伏見 2003, 立木・伏見 2004)。作品の最後の場面で兵十は、「ごん、お前だったのか、いつもくりをくれたのは」と語りかける。この箇所では、「兵十の母親にうなぎを食べさせられなかったこと」に対するごんの償いの気持や「ひとりぼっちになった同士、友達になりたい」というごんの気持が兵十に伝わった、と誤って解釈をする読者は少なくなかった。また、このような誤った読み取りを修正するための質問を行い「兵十はごんがひとりぼっちであることを知らない」「兵十は、いわしを投げ込んだのがごんであることを知らない」等々の事実を強く意識させた。しかし、文章中の事実を確認できたとしても誤った読み取りは修正されなかった。この理由について、立木・伏見 (2003) は「気持が通じ合える」という認知的枠組の影響が強いためであると考察している。『ごんぎつね』の場合、ごんの気持が兵十に伝わってほしいと思う願望が読者には

* 茨城キリスト教大学生生活科学部

** 千葉大学教育学部

*** 早稲田大学教育学部

非常に強い。兵十がごんの「償いの気持」や「友情を求める気持」を理解したと考えても不思議はない。だからこそ、ごんの気持が兵十に伝わらなかったという解釈は受け入れにくかったのではないかと、認知的枠組みの影響について述べている。

ここで、誤った読み取りに影響を与える要因を再度検討したい。この作品の場合には、主人公であるごんの視点に立って読者は物語を読んでいく。読者がごんの気持に共感し、ごんの気持が兵十に伝わってほしいと思うのは自然である。このようなごんに対する共感という心情が、誤った読み取りに大きく影響している可能性は十分考えられる。では、いったいどのような読者がごんに対して強く共感し、誤った読み取りをするのだろうか。この点について、ごんに対する共感性は、読者の一般的共感性と関わっているのではないかと考える。つまり、一般的に共感性の高い読者ほどごんの気持に共感し、ごんの気持が兵十に伝わってほしいと願う。そして、その強い願いが誤った読み取りに影響を与えるのではないだろうか。本研究ではこのような仮説に立って、読者の一般的共感性と誤った読み取りの関係について検証したい。

さらに、『ごんぎつね』の場合には、作品を読むときの信念（認知的枠組みに含まれるとも言えるが、より期待や気持に関わっている）が、誤った読み取りに影響している可能性も考えられる。信念が読みに影響するというのは、作品を読む以前に読者は作品や人間関係などについてなんらかの信念を持っていて、それに基づいて読み進めていくことがあるからである。この作品における信念について言えば、一つは作品の結末に対するある願望や期待であり、もう一つは人と人の関係に対する信念である。主人公に共感している読者は、作品の結末がハッピーエンドであることを期待することが多いと思われる。それは、テレビドラマで主人公が最後に死を迎えると、読者から抗議の手紙が送られてくることから推測出来る。また、ある読者は、人の気持は言葉で言わなくても伝わるものだ、という信念を持っているかもしれない。そのような読者にとっては、ごんの気持は言葉で言わなくても兵十に伝わるのではないかと思うだろう。このような作品の結末に対する信念と、人の気持の伝わりについての信念は、ごんぎつねの誤った読み取りに影響を与えているのではないだろうか。つまり、結末がハッピーエンドであることを期待する信念が強いほど、また登場人物の気持が伝わりやすいという信念が強いほど、誤った読み取りをする傾向が高くなると予想される。

本研究の目的は共感性と信念についての上記の2つの仮説を検証することである。

方 法

(1) 被験者

被験者は茨城県内の私立I大生活科学部の学生37人である。

(2) 調査の手続き

『ごんぎつね』の本文が印刷されている冊子（読み物冊子：A4判3頁）と、質問が記載されている冊子（質問冊子：表紙を除きA4判5頁）を被験者に配付した。調査の概略を図1に示す。被験者は①から⑤の手続きに従って課題に取り組んだ。

①情動的共感性（加藤・高木，1980）と信念質問。

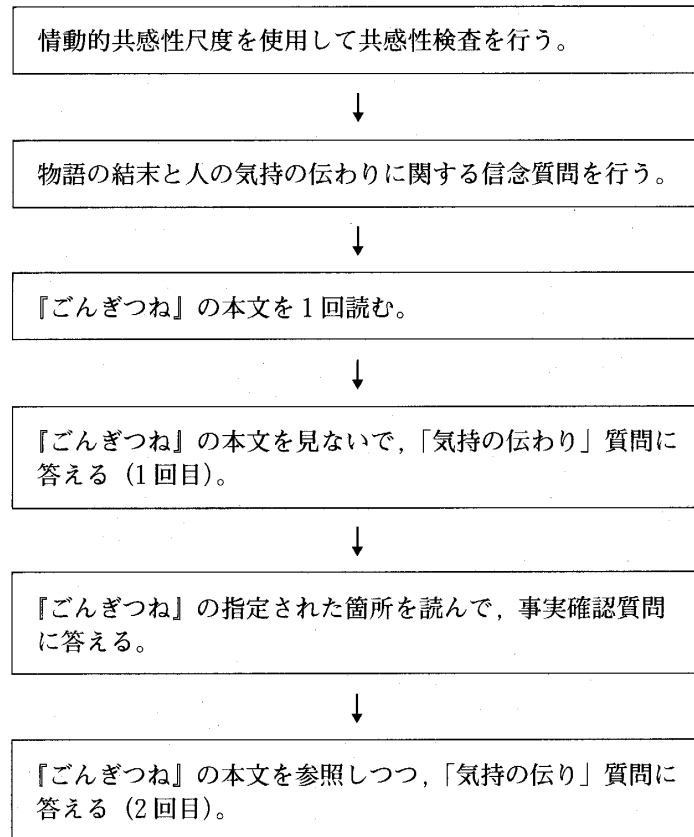


図1 調査の概略

加藤・高木（1980）が作成した情動的共感性尺度を使用して共感性検査を行う。また、物語の結末や関する質問と人の気持の伝わり関する質問（信念質問と呼ぶ）をする（表1、表2）。

②『ごんぎつね』を1回通読（実験者が音読し、被験者は本文を目で追う）。

③本文を見ずに「気持の伝わり」質問（1回目）に回答。

質問1の（1）から（3）は、ごんの気持がどの程度兵十に伝わったかを問う質問である。質問2は、「兵十と友だちになりたい」という気持をごんが持っていたかどうか、持っていたとしたらその気持が兵十に伝わったかを問う質問である（表3、質問1と2を「気持の伝わり」質問と呼ぶことにする）。本文に叙述された事実からすると、質問1の3問および質問2の（2）ではいずれも「伝わらなかった」と答えるのが適切である。

④冊子で指示された本文箇所（正しい読みとりを促進すると考えられる箇所）を見ながら文章中に書いてある事実について回答する（事実確認質問と呼ぶことにする、表4）。

⑤「気持の伝わり」質問（2回目）に回答。

『ごんぎつね』の本文を参照しつつ再度「気持の伝わり」質問に答える。

表1 共感性検査

次にいくつかの単文が書いてあります。それぞれの単文を読んで、あなた自身がどの程度そうだと思うかを判断してください。回答は1つに○をつけてください。(各問とも選択肢は「1. 全く違うと思う, 2. かなり違うと思う, 3. どちらかと言えば違うと思う, 4. どちらとも言えない, 5. どちらかと言えばそうだと思う, 6. かなりそうだと思う, 7. 全くそうだと思う」である。本表では省略)

1. 私は映画を見るとき、つい熱中してしまう。
2. 歌を歌ったり、聞いたりすると、私は楽しくなる。
3. 私は愛の歌や詩に深く感動しやすい。
4. 私は動物が苦しんでいるのを見ると、とてもかわいそうになる。
5. 私は身寄りのない老人を見ると、かわいそうになる。
6. 私は人が冷遇されているのを見ると、非常に腹が立つ。
7. 私は大勢の中で一人ぼっちでいる人を見ると、かわいそうになる。
8. 私は贈り物をした相手の人が喜ぶ様子を見るのが好きだ。
9. 私は会計事務所に勤務するよりも、社会福祉の仕事をする方がよい。
10. 小さい子どもはよく泣くが、かわいい。
11. 私は人がうれしくて泣いているのを見ると、しらけた気持ちになる。
12. 私は他人の涙を見ると、同情的になるよりも、いらだってくる。
13. 私は不幸な人が同情を求めるのを見ると、いやな気分になる。
14. 私は友人が悩み事を話し始めると、話をそらしたくなる。
15. 私はまわりの人が悩んでいても平気でいられる。
16. 私は人がどうしてそんなに動揺することがあるのか理解できない。
17. 私は他人が何かのことで笑っていても、それに興味をそそられない。
18. 人前もはばかりずに愛情が表現されるのを見ると、私は不愉快になる。
19. 私はまわりが興奮していても、平静でいられる。
20. 私は映画を見ていて、まわりの人の泣き声やすすりあげる声を聞くと、おかしくなることがある。

(註) 「感情的暖かさ」尺度は項目1から10, 「感情的冷淡さ」尺度は項目11から20である。

表2 信念質問

次の(1)から(4)について、自分の考えにもっとも近いと思う記号を①～⑥の中から選んで○をつけて下さい。(各問とも選択肢は「①非常にそう思う, ②かなりそう思う, ③ややそう思う, ④あまりそう思わない, ⑤ほとんどそう思わない, ⑥全くそう思わない」である。本表では省略)

- (1) 物語が悲劇で終わるときには、何らかの救いがあればいいのと思いますか。
- (2) 人の気持ちは言葉を使わないでも互いに伝わるとあなたは思いますか。
- (3) 人の気持ちというのは、言葉をいくら尽くしてもなかなか伝わらないものだと思いますか。
- (4) 物語はハッピーエンドで終わってほしいと思いますか。

表3 「気持の伝わり」質問

以下の質問に答えて下さい（物語を見ないで答えて下さい）。

質問1

物語の最後で、兵十が「ごん、お前だったのか、いつも、くりをくれたのは」と言ったとき、ごんはうなずきました。この時、下の(1)～(3)のごんの気持はどのように兵十に伝わったのでしょうか。自分の考えにもっとも近いと思う記号を、①～⑥の中から選んで○をつけてください。（各問とも選択肢は「①非常によく伝わった、②かなり伝わった、③やや伝わった、④あまり伝わらなかった、⑤ほとんど伝わらなかった、⑥全く伝わらなかった」である。本表では省略）

- (1) 「自分のいたずらのために兵十は母親にうなぎを食べさせられなかった。だから、いわしを持って行ってつぐないたい」というごんの気持
- (2) 「自分のいたずらのために兵十は母親にうなぎを食べさせられなかった。だから、くりを持って行ってつぐないたい」というごんの気持
- (3) 「兵十は自分と同じひとりぼっちになってしまったなあ」というごんの気持

質問2

- (1) くりを兵十に持って行ったとき、「兵十と友だちになりたい」という気持をごんは持っていたでしょうか。

ア 持っていた イ 持っていなかった

↓

上の(1)で ア を選んだ人のみ(2)にお答え下さい。

↓

- (2) 自分の考えにもっとも近いと思う記号を、①～⑥の中から選んで○をつけてください。「友だちになりたい」というごんの気持は最後に兵十に伝わったのでしょうか。（選択肢は「①非常によく伝わった、②かなり伝わった、③やや伝わった、④あまり伝わらなかった、⑤ほとんど伝わらなかった、⑥全く伝わらなかった」である。本表では省略）

(3) 仮説

共感性との「気持の伝わり」質問について

- ①気持の伝わり質問の1回目では、共感性の高い者は低い者に比べ、「ごんの気持は伝わった」とする答が目立って多いだろう。
- ②第1回目から第2回目への反応の変化に関して言えば、共感性の低い者は高い者に比べ、「ごんの気持は伝わらなかった」とする答が増えるだろう。

信念との「気持の伝わり」質問について

- ③物語作品の結末が幸運で終わることへの期待などの信念が強いほど、気持の伝わり質問の1回目では、「ごんの気持は伝わった」とする答が目立って多いだろう。
- ④第1回目から第2回目への反応の変化に関して言えば、信念が弱い者は強い者に比べ「ごんの気持は伝わらなかった」とする答が増えるだろう。

表4 事実確認質問

質問3

『ごんぎつね』の本文を見ながら、問に答えてください。指定された箇所の文章を参照して、正しいものに○をつけてください。

0 (読み物1 ページ2 段10 行目「兵十だな」から、1 ページ3 段40 行目「～あなのそとの、草の葉の上にのせておきました」の部分参照して)

兵十ははりきりあみでさかなやうなぎをとりましたが、それは何のためですか。

ア 病気の母親に食べさせるため イ 何のためかわからない

1-1 (読み物2 ページ2 段7 行目「そのばん、ごんは～」から、2 ページ2 段40 行目「～あんないたずらをしなけりゃよかった」の部分参照して)

兵十が母親にうなぎを食べさせてあげられなかったのは自分のせいだとごんは後悔していましたか。

ア 後悔していた イ 後悔していなかった

1-2 (上記の箇所から物語の最後までを参照して)

上述のごんの気持を、兵十は知ることができましたか。

ア 知ることができた イ 知ることはできなかった

2 (1 ページ1 段11 行目「ごんは、ひとりぼっちのこぎつねで、～」の文、および2 ページ2 段28 行目「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」の部分参照して)

ごんはひとりぼっちのきつねだ、ということを兵十は知ることができましたか。

ア 知ることができた イ 知ることはできなかった

3 (読み物全体を見て)

ごんは葬式を見て兵十の母親が死んだことを知りましたが、ごんがそのこと(母親の死)を知っていることを、兵十は知ることができましたか。

ア 知ることができた イ 知ることはできなかった

結 果

共感性と「気持の伝わり」質問

情動的共感性の「a 感情的暖かさ」(項目1 から10)と「b 感情的冷淡さ」尺度(項目11 から20)の中央値を基準として、a が高くb が低い者を「高共感群」(12 人)、a が低くb が高い者を「低共感群」(14 人)とした。以下、この26 人を分析の対象とする。

「気持の伝わり」質問1 の評価結果を表5 に示す。6 段階で求めた回答を1 点～6 点で点数化(高得点ほど「伝わらなかった」を意味する)し、高共感群と低共感群の平均値も合わせて示す。共感性の高低×質問時期×質問1 の種類による3 要因の分散分析を行ったところ、質問時期 ($F(1, 24)=9.90, p<.01$)、質問1 の種類 ($F(2, 48)=24.38, p<.01$)、[共感性の高低]×[質問時期]の交互作用 ($F(1, 24)=5.18, p<.05$) が有意であった。単純主効果の検定を行ったところ、1 回目では共感性低群の値は高群より高い傾向であり ($F(1, 24)=3.55, p<.10$)、2 回目では差は有意ではなかった。また共感性高群は1 回目から2 回目へと有意に上昇したが ($F(1, 24)=14.69, p<.01$)、共感性低群の伸びは有意でなかった。

気持に伝わり質問2 と共感性の関係を検討する。「兵十と友だちになりたいという気持ちをごんは持っていたか」という質問2 (1) で、「持っていた」を選択した者は、高共感群

のうちで、1回目 58% (7/12)、2回目で 75% (9/12) であった。低共感群では、それぞれ 43% (6/14)、36% (5/14) であった (表 6)。1回目と2回目の比率について対応する比の差の検定を行ったところ、高共感群と低共感群いずれにおいても有意な差は認められなかった。また、1回目における高共感群と低共感群の間においても、有意な差は認められなかった。

質問 2 (2) は、質問 2 (1) で「持っていた」と答えた者に対し、「友だちになりたい」というごんの気持ちが最後に兵十に伝わったかどうかを 6 段階で評定させるものである。1回目の高共感群と低共感群の平均はそれぞれ 2.29 と 3.33 であった。2回目ではそれぞれ 3.00 と 3.80 である。1回目、2回目ともに高共感群と低共感群の間に有意な差は見られなかった。

共感性と信念質問

信念質問 (1) と (4) では物語の結末がハッピーエンドであることを期待するか否かについて、(2) と (3) では人の気持ちが伝わるかどうかについて尋ねている。ハッピーエンドについての期待および人の気持ちが伝わると思っている程度が大きいほど高い得点になるように、(1)、(2)、(4) の質問においては、「非常にそう思う」を 6 点とし、「全くそう思わない

表 5 「気持ちの伝わり」質問 1 の共感別人数

			評定	6	5	4	3	2	1	平均
いわしで償い	高共感	1回目	2	0	1	5	1	3		3.00
		2回目	3	2	3	1	2	1		4.00
	低共感	1回目	3	5	0	3	3	0		4.14
		2回目	3	3	2	4	2	0		4.07
くりで償い	高共感	1回目	0	0	2	1	4	5		2.00
		2回目	0	2	1	5	2	2		2.92
	低共感	1回目	0	2	2	1	6	3		2.57
		2回目	2	2	1	1	5	3		3.00
兵十も一人 ぼっち	高共感	1回目	0	1	5	2	2	2		3.08
		2回目	2	1	6	1	0	2		3.83
	低共感	1回目	5	2	2	2	2	1		4.21
		2回目	5	1	4	2	1	1		4.29

(注) 1…非常によく伝わった、2…かなり伝わった、3…やや伝わった、4…あまり伝わらなかった、5…ほとんど伝わらなかった、6…全く伝わらなかった

表 6 「気持ちの伝わり」質問 2 (1) の共感別人数

	持っていた		持っていなかった	
	1回目	2回目	1回目	2回目
高共感群	7	9	5	3
低共感群	6	5	8	9

表7 信念質問の共感別人数

		6	5	4	3	2	1	修正得点平均
(1)	高共感	0	0	1	3	5	3	4.83
	低共感	1	2	3	3	2	3	3.86
(2)	高共感	0	0	3	5	4	0	4.08
	低共感	1	1	3	8	1	0	3.50
(3)	高共感	0	2	2	4	3	1	3.08
	低共感	0	0	2	4	6	2	2.43
(4)	高共感	0	0	0	3	8	1	4.83
	低共感	2	0	2	5	2	3	4.00

(註) 1…非常にそう思う, 2…かなりそう思う, 3…ややそう思う, 4…あまりそう思わない, 5…ほとんどそう思わない, 6…全くそう思わない

表8 事実確認質問の共感別人数

		0	1-1	1-2	2	3
高共感	正答	9	12	6	11	12
	誤答	3	0	6	1	0
低共感	正答	9	14	8	12	11
	誤答	5	0	6	2	3

(註) 正答は問の順に, イ, ア, イ, イ, イ

い」を1点とした。(3)の質問については逆に点数化した(以上の得点を修正得点と呼ぶ)。高共感群と低共感群の信念質問の評定別人数および修正得点平均を表7に示す。高共感群と低共感群の平均値は表2の質問(1)で4.83と3.86($t=1.85$ $df=24$ $P<.05$), 質問(4)では4.83と4.00($t=1.69$ $df=24$ $P<.05$)であり, いずれも高共感群が有意に高かった。一方, 質問(2)と(3)では有意な差は認められなかった。このことは, 共感性の高い者ほど物語の結末がハッピーエンドであることを強く期待することを示している。

共感性と事実確認質問

事実確認質問の結果を表8に示す。正答に1点を与え5問の合計点を個人ごとに計算した。高共感群, 低共感群それぞれの平均点は4.17と3.86になり, 有意な差は見られなかった。

信念質問と「気持の伝わり」質問

信念質問(1), (4)と(2), (3)はそれぞれ異なる信念を質問している。そこで, 2つのタイプの信念別に「気持の伝わり」質問との関係进行分析する((1)と(4)を信念質問A, (2)と(3)を信念質問Bとする)。

まず, 質問(1)と(4)の得点合計を各個人別に計算し, 中央値を基準としてその値が高

表9 「気持ちの伝わり」質問1の信念得点別評定平均

		質問 (1)		質問 (2)		質問 (3)	
		1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
質問 A	高得点群	4.00	4.06	2.25	2.94	3.81	4.25
	低得点群	3.62	3.95	2.52	3.10	3.71	3.71
質問 B	高得点群	3.80	4.00	2.35	2.75	3.40	3.60
	低得点群	3.76	4.00	2.47	3.35	4.18	4.35

表10 「気持ちの伝わり」質問2 (1) の信念得点別人数

		持っていた		持っていなかった	
		1回目	2回目	1回目	2回目
質問 A	高得点群	11	9	5	7
	低得点群	9	11	12	10
質問 B	高得点群	13	13	7	7
	低得点群	7	7	10	10

いものを「信念質問 A 高得点群」(16 人)、低いものを「信念質問 A 低得点群」(21 人)とした。高得点群と低得点群の「気持ちの伝わり」質問1の平均値を表9に示す。信念質問 A 得点の高低×質問時期×質問1の種類による3要因の分散分析を行ったところ「質問1の種類」の主効果のみが有意であった ($F(2, 70)=38.86$ $p<.01$)。

次に、信念質問 (2) と (3) について上記と同様に得点合計を計算し、中央値を基準としてその値が高いものを「信念質問 B 高得点群」(20 人)、低いものを「信念質問 B 低得点群」(17 人)とした。高得点群と低得点群の「気持ちの伝わり」質問の評定平均値を表9に示す。信念質問 B 得点の高低×質問時期×質問1の種類による3要因の分散分析を行ったところ、質問の種類 ($F(2, 70)=38.77$ $p<.01$)、「信念質問 B 得点の高低」×「質問1の種類」の交互作用 ($F(1, 35)=3.33$ $p<.05$) が有意であった。信念質問 B 得点の高い群でも低い群でも、得点質問 (1) と質問 (3) の得点が質問 (2) の得点よりも高い傾向であったが、信念質問 B 得点の違いによる差は見られなかった。

信念質問 A と「気持ちの伝わり」質問2 (1) との関係を見てみる。質問2 (1) で「持っていた」を選択した者と「持っていなかった」を選択した者の人数を表10に示す。高得点群、低得点群ともに、1回目と2回目の比率の差は有意でなかった。また、1回目、2回目ともに、高得点群と低得点群の間の差は有意でなかった。信念質問 B と「気持ちの伝わり」質問2 (1) との関係についても人数を表10に示す。信念質問 A と同様の分析を行ったところ、いずれも有意差が認められなかった。

信念質問と事実確認質問

事実確認質問の結果を表11に示す。質問 A、質問 B いずれも高得点群と低得点群の間に

表 11 事実確認質問の信念得点別人数

事実確認質問			0	1-1	1-2	2	3
質問 A	高得点群	正答	11	16	9	15	14
		誤答	5	0	7	1	2
	低得点群	正答	11	21	12	19	18
		誤答	10	0	9	2	3
質問 B	高得点群	正答	12	20	10	18	16
		誤答	8	0	10	2	4
	低得点群	正答	10	17	11	16	16
		誤答	7	0	6	1	1

有意差は見られなかった。

考 察

共感性と「気持の伝わり」質問の関係について、①気持の伝わり質問の1回目では、高共感群が低共感群に比べ、「ごんの気持は伝わった」とする答が目立って多いだろう。②第1回目から第2回目への反応の変化に関して言えば、低共感群は高共感群に比べ、「ごんの気持は伝わらなかった」とする答が増えるだろう、という仮説を立てた。一読した後の1回目の「気持の伝わり」質問では、共感性の高い者は低い者より、ごんの気持が兵十に伝わったと誤読をする傾向が示された。これは仮説①を支持している。1回目から2回目への読みの変化について言えば、仮説とは逆に高共感群において、「ごんの気持が伝わらなかった」とする答えが増えている。これは、仮説②を支持していない。読みに及ぼすスキーマの影響は従来から指摘されてきたが、以上の結果は「性格特性」が読みを左右する可能性を示している。しかし事実確認質問に回答することによって、高共感群もそのような誤読から脱することが示された。

信念と「気持の伝わり」質問の関係については、③物語作品の結末が幸運で終わることへの期待などの信念が強いほど、気持の伝わり質問の1回目では、「ごんの気持は伝わった」とする答が目立って多いだろう、④第1回目から第2回目への反応の変化に関して言えば、信念の弱い者は強い者に比べ、「ごんの気持は伝わらなかった」とする答が増えるだろう、という仮説を立てた。しかし、仮説③、④を支持する結果は得られなかった。

共感性と信念の関係については、共感性の高い者ほど物語の結末がハッピーエンドであることを強く期待する傾向のあることが示された。しかし、信念と「気持の伝わり」質問の間に有意な関係が認められなかったことから、共感性、信念と誤った読み取りという3つの要因相互の関係については明らかにすることが出来なかった。

以上の結果は物語の読み取りにおいてどのような意味を持つのだろうか。共感性については向社会的行動との関連について研究がなされてきた (Eisenberg & Mussen 1989, 澤田 1992, 森下・仲野 1996)。しかし、物語の読み取りとの関連を調べた研究はほとんどない。この点で、物語の誤った読み取りに共感性が影響するという結果が得られたのは重要

な意義を持っている。また、文学教育においては、物語を読む際には登場人物の心情を読みとるよう指導がなされ、登場人物に共感を持つようになることがしばしば期待される。この点に関して、今回の結果は登場人物への共感、つまり強い感情移入が、文章の事実を正確に読みとることを妨げて、誤った読み取りを生み出す可能性を示唆している。登場人物への共感と読み取りについて新たな問題を提起するという点で、これからの文学教育にとって意義ある結果と言えよう。他方、読みに対する信念の影響については、今回の研究で明らかにすることが出来なかった。この点については今後の課題と言えるだろう。

文献

- Eisenberg, N., & Mussen, P. H. 1989 *The Roots of Prosocial Behavior in Children*. Cambridge University Press. (菊池章夫・二宮克美訳 1991 思いやり行動の発達心理 金子書房)
- 石田佐久間 1980 童話・物語教材の本質と指導上の留意点 石田佐久間編著 分種別国語授業の展開技術 第1巻 童話・物語教材における授業の進め方・深め方 東洋館出版社 9-46.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における情動的共感性の特質 筑波大学心理学研究 2, 33-42.
- 麻柄啓一 1994 文学作品の読み誤りとその修正について 読書科学, 38, 5-12.
- 三好修一郎 1999 新美南吉「ごん狐」の読みと教材性 国語科教育, 46, 9-16.
- 森下正康・仲野綾 1996 児童の共感性の認知的因子と情動的因子が向社会的行動におよぼす影響 和歌山大学教育学部紀要 教育科学, 46, 57-71.
- 新美南吉 1988 ごんぎつね 石森延男他 小学校国語 4下/はばたき 光村図書 54-77.
- 澤田端也 1992 共感の心理学—そのメカニズムと発達 世界思想社
- 須田実 1991 a 文学教材の指導 国語教育研究所編著 国語教育研究大辞典 明治図書 740-743.
- 須田実 1991 b 理解(文学教材)の授業研究 国語教育研究所編著 国語教育研究大辞典 明治図書 845-853.
- 高森邦明 1975 児童文学教材の研究 鳩の森書房, 122-123.
- 高橋善彦 1978 「ごんぎつね」(四年)の実践 群馬実践国語研究会 実践国語研究双書1・言語力をつける読みの授業 明治図書 116-118.
- 立木徹・伏見陽児 2003 文学作品の誤った読み取りとその修正 読書科学 47-2, 50-59.
- 立木徹・伏見陽児 2004 文学作品の誤った読み取りの修正に及ぼす「事実確認」質問と「証拠指摘」質問の有効性 茨城キリスト教大学紀要 38, 159-173.

The Effects of Empathy and Belief on the Misinterpretation of a Literary Work "Gongitsune"

Toru Tatsuki, Yohji Fushimi and Keiichi Magara

Nankichi Niimi's literary masterpiece, *Gongitsune*, serves as standard educational material for teaching Japanese at many Japanese primary schools. Tatsuki & Fushimi (2004) reported that some readers believe Hyoju able to understand both Gon's intention of compensating for depriving Hyoju's mother of the eels and Gon's feelings of wanting to make friends with Hyoju because they are now both alone. Read properly, Hyoju clearly does not understand Gon's intention and feelings, but this misinterpretation still occurs. Researchers determined this was due to readers strongly identifying and empathizing with Gon, the protagonist.

This article examines the effects of empathy and belief on the misinterpretation of *Gongitsune* with thirty-seven university students as subjects. A 5-page questionnaire was distributed. On pages 1 and 2, subjects were asked to answer the empathy test and four belief

questions about novel endings and mutual understanding. After answering these questions, an examiner read the story aloud while subjects simultaneously read the story silently to themselves. On page 3, subjects were asked to answer four questions, without referring the text, about if Hyoju understood Gon's feelings and intentions, ranking their responses by six degrees of understanding from 1 = very well understood to 6 = not understood at all. On page 4, subjects were then assigned specific story passages to read and answered five yes or no questions to confirm their understanding of the story. Next, subjects were again allowed to refer to the text. On page 5, they answered the same questions as on page 3, regarding Hyoju's understanding of Gon's feelings and intentions.

Results suggested that the higher the empathy test score, the more subjects misinterpreted Gongitsune, but subject belief did not apparently effect such misinterpretation.